

“海女”に学ぶ

石原義剛 海の博物館館長
三重大学客員教授

□海女とは

大海原にでて、ほぼ 50 秒の間に、素潜りで海面と海底を往復し、アワビ、サザエや海藻類を追い求めることを生業とする女性を「海女（あま）」と呼びます。そんな海女は世界の海に、日本と韓国にしかいません。日本では列島の西を中心に 18 の県に 2174 人（2010 年調査）が確認されています。

韓国では済州島に 4881 人（2012 年）と本土の約 5000 人（推定）を合わせた約 10,000 人がいます。韓国の海女の歴史は済州島が古く、本土へは 1890 年代から済州海女が進出し、次第に拡散していききましたが、現在は多く沿岸各地で在地の人が海女漁をしています。

日本列島では、少なくとも縄文時代後期の 5000 年以上前から、潜水漁をする男女がいたものと考えられる証拠があります。そんな長い伝統を有する海女を、日本でもっとも多く、半数近い 761 人（2014 年）を占める三重県と韓国済州道（県）が中心となって、日韓共同して、「海女」をユネスコ（世界）無形文化遺産に登録しようと活動を進めてきました。去る 2014 年 10 月 25、26 日、三重県志摩市で開催された第 5 回「海女サミット」には 10 県から 140 人と済州島の海女の参加があり、連携の輪が広がりつつあります。しかし、残念ながら韓国は 2014 年 3 月 31 日、単独でユネスコへ申請を提出しています。

海女をユネスコ無形文化遺産に登録しようという動機は、海女の急激な減少にあります。最盛時には日本列島に 17000 人（1956 年）ほどいたのが、ほぼ 2100 人に減ったのですから、大変な減りようです。しかし、海女がいなくなってもいいではないか、海女でなく男海士でもいいし、潜水機器を使う漁法もあるし、極端な人はアワビや海藻は養殖が発達しているから、海女だけを残してもしかたがないだろう、といえます。そうでしょうか。

わたしは、海女は単なる海で、潜水作業をして働く女性という珍しいだけの存在ではなく、日本の優れた常民の伝統文化であり、さらに現代社会において大きな意義を有する「海女文化」の担い手だから、どうしても残してゆかねばならないと考えています。その理由を 6 つにまとめて見てみました。

□潜水という独特の技術をもつ

1 つ目は、素潜り潜水という特別な技術を身に付けた、自立した女性だと云うことです。海女になったばかりの若い女性と比べれば、経験 30~40 年で、50 代 60 代の海女では個人の身体能力の差もありますが、経験による明らかな漁獲の差があります。経験豊かな海女ほど漁獲の量は多いのです。海女独特の潜水技術の熟達と長年の経験による漁場の熟知の結果です。子どものころから、早く海底に届く潜水の訓練を遊びの中で覚えてきた海女たちは、海底を目がけて真っ直ぐに最短距離で潜ります。それが呼吸を獲物探しに少しでも多く使える潜水法なのです。さらに海中の潮の流れは複雑多岐ですし、アワビやサザエの棲む岩礁は位置も形も複雑です。それらを総て知っているからこそ優れた海女なのです。

特別な技術を身に付けた彼女たちは、海中では誰にも頼るものがなく、自分で判断し、自分で行動す

る自立した女性です。1960年以降、ウエットスーツの普及により、それまでは寒さに弱く参入の少なかった男海士が増える傾向にあります。それでも持ち前の辛抱く粘り強い性格で海女は男に負けぬ漁をつづけています。

□生業の長い歴史

2つ目は、そんな**海女の歴史がどんな生業を営む民よりも長い**と云うことです。各地に残る縄文～弥生時代の遺跡から、大量のアワビ殻とともに鹿角製や鯨骨製のアワビオコシと呼ばれる道具が出土します。間違いなく潜水をしてアワビを獲っていた女性がいたことを証拠づけています。以降、狩猟の民マタギとともに漁撈の民アマは3000年とも5000年とも云える長い歴史を重ねています。それは為政者や貴族のではない、名も無い無辜の女性の歴史として間断なくつづいて来たのです。日本の文献では「万葉集」の山上憶良の文に『潜女（かづきめ）』の文字が現れ、アマに女性もあることを示す最初ですが、以降、「枕草子」「延喜式」などに記されつづけました。江戸時代の浮世絵には多数描かれ、産業を紹介した「日本名産山海図会」にも紹介されています。（江戸期の文字には『蚕婦』が多い）働く女性がこのような姿で紹介されていることは海女以外には多くありません。

□持続性ある資源の維持

3つ目は、**持続性のある資源維持のやり方を守って来た**ことです。海女の歴史が長く続いてきたのは、目的とする漁獲物を取り尽くすことが無ったためです。今日風にいえば、持続性のある資源維持のやり方を工夫し、乱獲をしない約束事を守ってきたからです。海女は度々資源枯渇の危機に直面してきました。例えばガラスの水中眼鏡が開発された時、アワビの乱獲が心配され、多くの漁村では10年近く使用を禁止しました。その後、便利さには勝てず使用されるようになりましたが、多くの漁獲量を制限する規約を決めるようになりました。採捕するアワビ、サザエの大きさや採捕期間は法令で規定するようになりました。アワビ、サザエの餌となる海藻類も採り過ぎないように約束事を作りました。結果は資源を守ることになり、海女漁の持続性が維持されてきたのです。

□海なる自然と共生

4つ目は、海女の**自然との共生**です。海女の漁獲の目的はアワビ、サザエ、ウニ、ナマコなどの動物とワカメ、ヒジキ、テングサなどの海藻すなわち植物です。海女の活動する海には自然なる海の生態系が確実に存在し、海女が参加することで「里海」という共生関係が出来上がっています。そこは藻場あるいは海中林と呼ばれる『海の森』で、魚介類の揺り籠であり保育所です。海女はそこから大きな海の恵みをもたらしているとともに、無意識のうちに生態系を守る役割をはたしています。これまでは無意識だった自然なる海を守る役割を、共生関係を大切にして、はっきりした意識を持って守ってゆきます。

□漁村の共同体の要として

5つ目は、海女が**漁村という共同体社会の要**になっていることです。人間社会が共同体社会であることは云うまでもありませんが、とくに漁村の人々は生産基盤を共有しており、生産活動の多くを参加者の助け合いに依存しています。そして今日では希薄化が進んできたとはいえ、まだ漁村では日常生活の多くのところで共同体が生きています。その中心に女性である海女がいます。海女は自立していると云いましたが、船を操ったり道具を作ったり漁場を記憶したりする男性の役割も欠かせませんし、それをよく知っています。まさに男女共同参画の共同体社会であります。

□多様な海女の有り方

6つ目は、**海女の存在形態が多様だ**ということです。石川県輪島の海女はほぼ一年を海で暮らす専門的

な操業形態をとっています。三重県鳥羽市石鏡の海女もほぼ海で暮らしを立てています。千葉県では冬磯は禁止とあって、10月に漁期が終わると次の春まで海女漁は行われません。同じ三重県鳥羽市和具浦の海女は年間7日間しか潜水作業をしません。操業日数だけでもこんなに差があります。多くの収入を得るために一年中潜る海女もいれば、秋冬は夫とともにイセエビ漁に出る海女もいます。夫が公務員だったり、会社員の海女もたくさんいます。また楽しみで短時間の磯の海女漁に出る80~90歳の老海女がいます。

存在形態のこの多様性は、海女の強かさを表わしています。海で働くばかりでなく、畑仕事もすれば、旅館の手伝いにも出ますし、出稼ぎもします。そして最後に帰ってくる海があります。子育ての終わった女性が海女をはじめの姿がどこでも見られます。

科学技術が発達した結果、人間は次第にキツイ肉体労働から解放され、経験の蓄積による知識さえ必要としない、ロボットとコンピュータが労働に代わる時代が来ています。そんな時代に海女が存在することは奇跡とさえ考えられるでしょう。なんで今更「素潜り」なのだろうか。しかし、水中での「50秒の勝負」に危険をも顧みず挑戦しつづける海女たちは、陸に上がった時、屈託なく楽天的です。焚火で身体を温めながら仲間と話す彼女たちの中には笑いが絶えません。海女は自分の頭脳で判断して獲物を探し、自分の肉体で獲物を獲る、苦しさ厳しさとともに、その楽しさ、働くことの根底にある楽しさを知っています。それは人間が遠い祖先から受け継いできた生き方だと信じています。

今わたしたちは、長く受け継がれてきた祖先からの経験を、海女文化として残して行きたいと思っています。いや残さねばならないのです。人間が人間であることを忘れないために。

□子どもたちに「海女」を伝えたい

このような海女の生き方の素晴らしさを、わたしは子どもたちに伝えたいと思います。海女は多くのことを教えてくれます。しかし、海女のこれまでの生き方は経験的ではありますが、決して科学的ではありません。海女が潜水作業をする海中の世界は、まだ未知の世界です。海の生態系も知り尽くされていません。残された未知の世界です。子どもたちの探求すべき謎に満ち溢れている世界があります。

そして「海女」という人間らしい人間そのものの生き方があります。わたしたちは今後限られた資源を持続的に利用しながら、争いのない平和な社会を築いて行かなければなりません。海女は持続的な未来の社会を考える上で素晴らしい模範を示してくれています。